ゼッター勝つ！！

マイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼツテー勝つ！！

【コード】

N1606A

【作者名】

マイ

【あらすじ】

このお話は、新一の中学校に行ってる時の話です！！

前編

これは、新一が中学生のときの話である。

キヤー！！！！工藤先輩カツコイ〜

新一は中学2年生。部活はサッカー、そしてプロ並みのキック力！おまけに学年トップの頭脳！！

女の子はみな新一のファンになっていった。

授業中・・・

科目は数学だった。新一は授業なんて上の空・・・ってカンジで窓の外を見ていた。

すると・・・ボコッ

「こら！工藤、ちゃんと授業聞けっ！！」

教科書で頭をたたかれた。

新：「いてっ、はい・・・すみません」

クラスメイトたちは、そんな新一を見てクスクス笑っていた。

「それじゃあ工藤、この問題を解いてみる」

そついうと黒板を指差した。

この問題はチヨ一難問！みんな苦戦してなかなか解けないでいる問題だった。

新一は問題を読むと・・・

新：「先生、できました」

たった数秒で解いてしまった！

みんな「スッゲー」とか、「工藤君さすがっ」と言う声が聞こえています。

「工藤、正解だ。おまえ難しいのに良くできたな！」

つと、先生もびっくりしながらほめた。

その日のうちにこのうわさは広まり、よけいに女の子たちは新一のファンになってしまった。

蘭はというと、空手部に入り新人の中でも人目置ける存在になっていた。

（サッカー部）

「みんな集合ー」

顧問の先生が部員たちを呼んだ。

「今日は、こんどのと大会の練習をする」

「はいっ!」

その日から大会に向けて、毎日夜遅くまで練習した。でも、新一がいれば必ず準決勝に残るのは確実だった!

部活が忙しく、このころ新一は寝不足気味であった・・・

そして、あっという間に時が過ぎ、都大会の試合が始まったっ!!!!!
まあ、言うまでもなく勝ち、次、その次々と勝って行き、とうとう
準決勝も勝ち、決勝戦まで上り詰めた!

決勝戦当日

応援には蘭はもちろんの事、園子や、クラスメイト、新一のファンの子・・・大勢見に来ていた。

そして、いよいよ試合開始っ

ピッ!ッ!ッ!

ホイッスルの合図とともに試合が始まった!!!

相手はライバルの米花中学校。そして、ここにも新一同様、強い選手がいた！

その名は・・・

‘阿東真二！’ 顔は少し新一似だが、性格はとっても悪い！女つたらしで、勉強もできないが、サッカーの腕前は最強っ！

・・・だが、阿東はこの前の試合で新一にボールを取られそうになり、足をくじいて試合に負けてしまった。

それ以来、阿東は新一の事を逆恨みしており、新一と対戦するのを待っていた・・・この試合、どうなってしまうんだ？！

今、新一がボールを持っている。すると、阿東が隣に来て

阿：「お前には負けないからな」

新：「オレだって、お前みたいなサッカーしかとりえのないヤツに負けたかねーよっ！」

つと二人ともならみ合い・・・コワッ

新一はスキをみて、ボールを仲間に渡した。そして新一のアシストもあつてゴールを決めた。

すると、今度は阿東のロングシュート!!

1対1

このやり取りをして、

3対2になった時、前半戦の試合が終わる笛が鳴った・・・

新：「ふうー！1点リードかあ」

「でも工藤、このままじゃ分かんねーよ」

新：「だいじょぶだって！オレがいりゃー何とかなるっしょ」
友達は笑いながら、

「おっ！言ってくれんジャン プロ級にうまい工藤がいりゃー平気
だなー!!」

新：「なんかいやみに聞こえるんだけど・・・」

「えっ？なんか言ったか??」

新：「っえ?!いや、なんでもねーよ」

「工藤、くれぐれも怪我すんじゃねーぞっ!!」

新：「バー口！オレがそんなドジすつかよ?!」

つと笑っていた。

園：「工藤君さすがね！妻として鼻が高いでしょ」

蘭：「だーかーらー！そんなんじゃないってばー!!」

園：「っそれにしても、新一ファンの子達づるさいわよね」

蘭：「うん、新一かつこつげだから」

園：「ねー蘭、そういえば工藤君、優勝したら何かいうことあるって言っただけだった？」

蘭：「うん。なんか大事な話があるんだってー」

園：「・・・もしかして、告白かもよ??」

蘭：「そんなわけないわよ！あの推理オタクに限って・・・」

そんな事を言っていると、後半戦が始まった！

「ピー」 試合開始!!

すると・・・米花に1点決められて、同点に追い詰められてしまった！

阿：「（工藤、お前に勝ち目はもつない。このオレが勝つんだ）」

「あ〜ん！新一君ファイト〜」

新一ファンの子供達の応援はいつそう増した。

園：「入れられちゃったね・・・」

蘭：「うん・・・でもまだ、後半戦始まったばかりだから大丈夫だよ」

蘭：「（新一、がんばって！新一なら勝てるよ！！）」
つと心に中でつぶやいた。

その声が伝わったのか、新一は蘭にウィンクした。

「えっ?!」蘭が言うと、

「ん？蘭どうかしたの??」園子はウィンクしたのを見ていなかった。

蘭：「うんっ！なんでもない！！（まったく新一ったら試合中にウィンクなんてしないわよー、ふっー!）」

新：「（残り20分か・・・そろそろ点決めないとやべー・・・）」

そう思いながら、ボールを追った。

スキを見て、新一は相手からボールを奪った。

そして・・・どんどん攻めて行った。だが、阿東に止められた・・・

「もうちょっとだったのにー」っと応援席から声が聞こえてくる。

だが、チャンスが来て新一にボールがわたった。

相手のゴール前に来たとき事件は起こった！

新：「つつ！！！」

なんとっ！阿東がボールを取ろうとわざと新一の足に自分の足をかけたのである。

だが、審判はレッドカードじゃなく、イエローカードを出した。

みんな、「今のはレッドだ！」っと言ったが試合は続行された・・・

がっ！新一の顔がくもっている。攻められているというのにもかかわらず、ボールを追いかけていない！

「どうしたのかな、新一君??」

ファンの子達が不安げに言う。

蘭：「（新……一……もしかして？）」

新：「（ってえ！阿東のヤツわざと足かけやがったな）」

そんな事を思いながら、ボールを追いかけた。だが、走り方がなんだかおかしい！！

そう、そのとき新一は足を捻挫していたのであった……

仲間が、「おい、工藤。どうかしたか？」

新：「えっ？！いや、なんでもない。それより攻めなきゃ！」

笑ってはいるものの内心、すごく痛かった。

だが、自分のせいで負けたくない！っという意思の方が強かった。

足の痛みを我慢しながら、阿東の持っているボールのところまで来た。

阿：「あれ？足くじいてなかったの？」

新：「阿東！！ふざけんなっ！」

阿：「はっ？！何のことだよ？」

新：「とぼけんなっ！オレの足にわざと引っ掛けたる？」

阿：「だっつたらどうなんだよ？」

阿：「カードちゃんと貰ったぜ??」

新：「くそっ」

足の痛みでうまく走れず、ボールは米花中のもと・・・

新一は、力を振り絞って走り出した。

そして・・・ボールは新一に渡った。

「キヤー!!がんばれ、新一君」

「ガンバレー！」

応援席の声がヒートアップした。

「（くそっ。ボールをけるたびに足が痛むぜ・・・）」

仲間にボールを渡したとき、力を入れたので足に激痛が走った！

新：「つつ!!!!」

新一の足はさつきよりも悪化していた・・・

さっきまでの元気はそこにはなく、痛みをこらえてる苦い顔だった。

園：「ねえ、蘭。工藤君変じゃない？」

蘭：「新一……足くじいてる……」

園：「えっ……？うそ？」

蘭：「さっき阿東君に足かけられたときだと思っよ……。新一、カッコつけどから途中で逃げるような事したくないんだよ」

園：「蘭……あんた良いお嫁さんになるよ！」

仲間へ渡ったボールはというと……何とか無事に敵には渡って
いなかった

そして！帝丹中の攻めに入った！！うまく敵の間を通り抜け、
ゴールの前まで来たっ！

だが、そこには阿東が立っていた。

何とかボールはとらせたくなないと、仲間から仲間へパスをした！

すると……

足をいたいたしくびっこしている新一がちょうどいい位置にいた。

新一は仲間へ合図した。

仲間は新一似ボールを渡し、新一は最後の力を振り絞ってボールを投げたっ！！！！！！！！

前編（後書き）

作者のマイより

いや〜！どうでしたか？サッカーの事があまり分からないマイなので、そこのは大目にみてやってください）（

さてさて、後半どうなってしまうんでしょうか？マイ的にけっこういけるかな〜なんて・・・思っちゃったりしてる作品なんで、どうか読んでください！！

感想もあつたらください

後編

シューーーーーー！！！！！

なんと！新一がけたボールはゴールに入ったのである

‘ワァーーーー！！’ 歓声が球場を包んだ

「「やった~~~~！！！！新一君マジかつこよかったー」

つと、ファンの子達も大喜び

園：「工藤君さすがねっ」

蘭：「うん！ったくあの推理オタク、サッカーのことになるとむきになって無茶するんだから~~~~！！！！でも、良かった」

園：「おやおや??のろけですかあ???」

蘭：「ちっ、違っわよ!!!もー園子ったらー!」

そんな事を言い合いながらふと、新一のほうをみると・・・

蘭：「新一、足痛そう・・・」

園：「えっ!？」

見ると新一は、みんなが喜んでいながらもかかわらず、一人で足を押さえうずくまっていた。

それを見たコーチは・・・

くタイムく

新一の下に駆け寄った。

「おい、工藤。どうかしたか？足、痛いのか?？」

先生や仲間が心配そうに新一を見ると、

新：「何でもないっスよっ!」

っと、笑ってごまかす。

観客がざわめいてきた・・・

コーチはなんと!新一の足首を思いつきり握った。

新：「いつつ！（やべー、ばれちまう）」

だが、我慢もむなしくコーチは、

「お前、足ひねったんだろつ。どうしてひねったときに言わないんだ！—こんなんで試合に出れると思ってるのか！—!!?」

新：「す、すいません・・・」

「くどー、何で黙ってたんだよ？」つと仲間が言つと、

新：「わりいー、俺のせいでみんなに迷惑かけたくなかったから・・・」

「何いつてんだよ?!お前のおかげで4対3だぞ?あと4、5分ぐらいしかねーから安心してベンチに座ってるっ!」

新：「本当か?」

「当たり前だ!俺たちがそんなにへたくそに見えつか?言つとくけど今のお前よりはうまいから!!」

つと笑つた。新一も、笑顔になつた

コ：「じゃ、工藤。試合終わるまでベンチに座って待ってる。終わったら病院つれくから・・・」

新：「はい」

コ：「歩けるか？」

新：「はい、平気です」

そうは言いつものの、足を引きずっていて痛々しい
すると・・・

仲間たちが手を差し伸べた。

仲：「まったく、世話の焼けるヤローだぜ」

新：「サンキュー」

そういうと、ベンチに歩いていった・・・

園：「工藤君、ベンチ入っちゃったね」

蘭：「足、痛いのコーチにはれたんだネ」

すると、残りの時間の試合が行われた。

仲間たちは新一の分までがんばった。新一の精一杯応援した！

そして　　『ピーッ！』

試合終了〜！！

点を入れさせないで、帝丹中学が1点差で勝った

『ワァ〜！！！！ワァ〜！！！！』

歓声が鳴り止まないっ！

新：「（よっしゃー！勝ったぜ！！！！）」

園：「うわぁー蘭、勝ったよ〜！！！！」

蘭：「うんっ！優勝だよー」

試合が終わり、選手たちは控え室に戻った。

仲：「いやー、優勝だ〜」

仲：「ごほうびの焼肉が食える〜！！！！これもすべて、工藤のおかげだな」

新：「んなことねーよー!!」

コ：「みんなっ！よくがんばってくれた！！先生はとってもうれしい！！今夜は焼肉食い放題だっ！！」

「「やった~~~~!!!!!!」」

少ししてから、

コ：「それじゃあ、お前たちは先に焼肉屋に向かってなさい。私と工藤は病院に行つてからそっちに合流するから」

「おれ、ついでに行きますよ!」 「あっ、オレも!」 「はい、オレも」

そして、数人の友達とコーチと一緒に病院に向かった・・・

・・・診察の結果は・・・

新一は、足を動かせないよう固定して、まっば杖をついて治療室から出てきた。

「おい工藤、どうだったんだ？痛くないのか？」

つと、友達が心配そうに聞く。

新：「捻挫だった。まあ、たいしたことねえーよっ！！」

コ：「何言ってるんだ！全治1カ月だぞっ、大怪我じゃないか！？
つたく無茶しすぎなんだよお前は・・・」

仲：「え〜〜〜！全治1カ月？？！なにがたいした事ないだよ？」

新：「・・・わりー」

そして焼肉屋に行き、思う存分食いらげた。

新一は友達に送ってもらって、家まで帰ってきた。

すると・・・

家の前に人影がある。近づいていくと

新：「ら・・・ん？」

蘭：「新一！」

新：「ドーしたんだよ？こんな所で？」

蘭：「それよりその足・・・やっぱり捻挫してたんだ」

新：「えっ！これは、その・・・」

「全治1カ月だつて！無茶しすぎなんだよつたく・・・だから毛利、コイツの面倒見てやってくれよな？？」

新一の代わりに友達が言ってくれた。

新：「よけーなこと言うなよ。んまあ、今日はありがとなっ！」

仲：「オウツ！！この後は夫婦水入らずで楽しんでね」

新：「オめーら、ふざけんなよ??！」

そうすると、帰って行ってしまった。

蘭：「怪我、大丈夫なの？」

新：「ああ、たいした事ねーから心配すんなつ。それより、オめーこそこんな時間にどうしたんだよ？」

蘭：「あ、うん。本当は試合が終わったらすぐ言いたかったんだけど、新一病院行っちゃったから言いそびれちゃって・・・」

『優勝、おめでとう！』

新：「サ、サンキュー／＼／」

蘭：「それじゃあ、私帰るね！お父さんに怒られちゃうから！」

新：「ああ、わざわざサンキューなっ！お前一人で帰れるか？」

蘭：「平気よ」

新：「でも・・・やっぱりオレが送ってくよ！」

蘭：「けが人は家でじっとしてなさい」

新：「本当に大丈夫か？」

蘭：「うん。じゃー、また明日」

新：「オウツ！」

そういうと、蘭は帰って行きました。

次の日

「新一くおきてるう?」

朝から蘭の元気な声が外から聞こえてくる。

新一はドアを開けた。

「なんだよ、こんな朝っぱらから・・・」

新一は寝起きそのままだった。

蘭：「今日から朝ごはん作ろうと思って!」

新：「いいよ・・・別に」

蘭：「そんな足じゃ、まともに立ってらんないでしょ?」

そういつと朝ごはんをつくり始めた。

そう、これがきっかけで蘭はよく新一の家に「ご飯を作りに来るようになったのである。」

END

くくおまけくく

新：「よお、蘭。元気か？」

蘭：「なーにが『元気か？』よ？いつになったら帰ってくんよ？」

新：「ごめん、蘭・・・」

蘭：「そーいえばさあ？中2の時、新一私に優勝したら言う事あるっていつてたじゃない？それって何だったの??」

新：「え・・・そんな昔の事忘れちまったよっ!!」

蘭：「えくくくっ！ショックー!!!あーあ、もっと早くに聞いてれば良かったあ・・・。思い出したら教えてよね」

新：「あ、あぁ」

蘭：「へんな事に首つつこまないで早く帰ってきなさいよ!-!」

新：「おうっ!-!」

ツー、ツー、ツー、ッ・・・

コナン：「（いえるわけねーじゃねーか。『蘭がこの地球上で誰よりも好きだ！』なんて・・・）」

後編（後書き）

作者のマイより

『ゼッター勝つー！』はどうだったでしょう??文章など、至らないところがたくさんあると思います。すみません・・・

今年からマイも進級しまして、中1になりました!!部活とかがいそがしくてなかなか小説が書けないんですけど、時間があつたら連載小説のほうを進めていきたいと思っていますっ

読んでくれて本当にありがとうございます!!感想などありましたら下さい。お願いします!(^U^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1606a/>

ゼッター勝つ！！

2010年10月9日03時08分発行